

書 評

Andrew Sanders, *Authors in Context: Charles Dickens*
(Oxford: Oxford UP, 2003)

中 村 隆

オックスフォード大学出版局の企画として「文脈の中の作家たち」(Authors in Context)というシリーズが2003年から始まった。これはOxford World's Classicsの姉妹篇として位置づけられており、主要な作家を取り上げる企画のようであるが、出足は鈍く、2004年6月の時点での既出版は2003年の4月に上梓された3点にとどまっている。その内訳はオスカー・ワイルド、ハーディ、ディケンズである。ハーディを担当するのが、このシリーズの編集主幹でもあるパトリシア・インガムで、彼女はハーディのみならず、*Dickens, Women and Language* (1992) などによりジェンダー系のディケンズ研究者としても知られている。ディケンズを担当するアンドリュー・サンダーズは改めて紹介するまでもないディケンズ学者であるが、彼は近年の*Dickens and the Spirit of the Age* (1999) といった研究書よりは、むしろディケンズを初めとする数多くのヴィクトリア朝小説の編者として記憶されているかもしれない。

本書は冒頭の章に43頁を割いてディケンズの小伝にあてていることからわかる通り、専門家向けの研究書ではない。この本は、学生も含めた一般読者向けのディケンズの入門書として書かれたと見るべきであろう。だからといって、著者は手抜きの仕事をしたわけではないだろうが、読後感はやや軽い。汗牛充棟も極まり、近年ではほとんど閉塞感すらあるディケンズ批評産業との関わりも希薄なもので、どこか涼しい顔でさりりと概括した観がある。しかし、所々には、専門家でもあまり知らないような知見を織り込み、学識の一端を伺わせる手管も有しており、何よりも、ディケンズの作品を隅々まで熟知していることにはやはり脱帽させられる。

サンダーズのディケンズをめぐる伝記の知識はディケンズの書簡に負っているところが少なくなく、このあたりは英国風というべきか、手堅い実証の強みを感じさせる。1965年に刊行が始まり2002年によやく完結したピルグリム版ディケンズ書簡集(全12巻、1万4千通余を所収)を丹念に読

み込む氏は、たとえば、「ディケンズ、政治、社会」と題された2章では、植民地インドの主題をディケンズの4男ウォルターとの関係の中で捉えている。16歳の息子ウォルターが士官候補生となり、インドに派遣されたのは1857年で、その後間もなくセポイの反乱が勃発する。そして、セポイの反乱の知らせを聞いた父親ディケンズは激昂した。著者が引く手紙の中で、ディケンズは「あの民族を皆殺しにするために私は最大限の努力をするだろう」と述べている。このような激した感情は当時それほど珍しいものではなかったというピルグリム版の編者の論評を紹介しながら、サンダーズが示唆しているのは、ディケンズの政治的な出来事への反応は、きわめて私的な感情に由来していたということである。つまり、ディケンズは冷静に時代を見つめる歴史家ではありえず、時として、過敏なまでに現在進行形の歴史に私的な感情をむき出しにした人だった。4男坊のウォルターは1863年にカルカッタで客死することになるが、これがディケンズのインドへの感情を決定的に変えることになったと著者はいう。いずれにしてもディケンズは、インドのみならず、イギリス植民地での土着民族の反乱には不寛容の姿勢で一貫していた。植民地に関してのディケンズの保守主義はよく指摘されるように、フェミニズムについてもいえることである。サンダーズの表現を借りるなら、ディケンズの描く女性の登場人物はwomanlyな家庭の天使風であるか否かの2つにはっきりと区別されるのだが、称揚される女性的で家庭的な特質と、通例はたっぶり皮肉られる非・女性的な猛々しい特質という相容れないはずのものが融合している稀有な女性がいる。ベツィーおばさんである。ベツィーのたぐいまれな強さと優しさをあぶり出していく著者の語り口は深い洞察に満ちている。

続く第3章で、サンダーズはディケンズを取り巻いていた同時代の文学者たちを実に滑らかに点描していく。ただし、語られている事柄は、少なくともディケンズ研究者にとっては先刻承知のものが多い。ディケンズがカーライルの『フランス革命』を500回も読んだと誇張していった話や、ジョージ・エリオットによるディケンズ批判（心理描写の欠如を嘆くもの）、ギャスケル夫人との『北と南』の*Household Words*誌への連載をめぐっての軋轢、ブルワー・リットンの助言を受けて『大いなる遺産』の結末部を書き換えた逸話など、人口に膾炙したものが少なくない。第4章は、ディケンズにおける中産階級の意義を探っており、穏やかで伝統的な（そして古風な）作品論の体裁を取る。サンダーズが注目するのは、ディケンズが深

い愛着を寄せた下級事務員、小商人、零細企業の経営者、小売業者などからなる低層中産階級の人々である。マルクスはかつてこの階級はいずれ労働者階級に呑み込まれるだろうと予言したのだったが、実はこの階級が19世紀に増大し続けたのであり、ディケンズの小説世界の豊かさはこれらの小市民によって支えられている。なるほど、多様で個性的な小市民の脇役たちがいなくなったら、ディケンズの小説の人間喜劇の味わいは随分と損なわれるだろう。たとえば、ウェミックのいない『大いなる遺産』が、クラチット一家が消えた『クリスマス・キャロル』が、法律文具商のスナグズビーの出てこない『荒涼館』が、ミコーバーを欠いた『ディヴィッド・コパフィールド』が考えられるだろうか。

「功利主義、宗教、歴史」と題された第5章では、『バーナビー・ラッジ』を論じる箇所が興味深い。『バーナビー・ラッジ』の有名な挿話に、「メアリー・ジョーンズの事件」というものがある。それは、現実にあった話で、乳飲み子を抱えた19才の母親が、布地を盗もうとした未遂の罪でタイバーンで絞首刑に処されるというものである。ディケンズが小説にこの実話を取り込んだのは、サンダーズによれば、ゴードン暴動のような市民の暴徒化の背景には、暴力的な国家権力とそれを具現する過酷な刑罰システムがあったからであり、市民の暴徒化と併置されて見られるべきは、貴族たちが権力者として簡単に市民を死刑台に送り込む法体系を作っていたことである。その端的な例が、俗に「血の法律」(Bloody Code)と呼ばれた18世紀特有の一連の法律で、これはごく軽い窃盗であっても、死刑にすることを可能にしていた。サンダーズはこの「血の法律」こそが暴徒に見られる血への渴望を生み出したのだと指摘している。

「科学と技術」という副題を持つ第6章では、地質学と進化論などの科学とディケンズの関わりが論じられている箇所が面白く読めた。著者によれば、1840年代にディケンズの科学観はかなり変貌する。そのきっかけは、地質学と進化論の知を解説する役割を果たしたチェインバーズの『創造の自然史の痕跡』(1844年)をディケンズが読んだことによる。ディケンズがチェインバーズのこの著書に美点を見出したのは、これが一般大衆に最新の科学の知見をわかりやすく解説する姿勢を見せていたからであった。自他共に認める大衆作家であったディケンズは科学の知見の大衆化にも深い関心を寄せた作家であり、それは彼が編集主幹を務めた週刊総合雑誌である*All the Year Round*の多数の科学記事に反映されていると著者はいう。

*All the Year Round*誌からの科学記事を具体的に引用してきて、ディケンズの作品へ言及していたならば、議論はよりスリリングな展開を見せたであろうと少し惜しまれる。

ディケンズ受容を幾つかの局面から綿密に検証する最終第7章の冒頭の挿話は興味をそそられる。というのも、20世紀前半のディケンズの人気を語るためにサンダーズが引き合いに出しているのは、ロイヤル・ドルトンという英国王室御用達の製陶会社が20世紀初頭に作ったという洋皿の話だからである。それは、セント・ポール大聖堂を背景にしたディケンズが中央に描かれ、皿の縁にはディケンズの作品の11人の登場人物を配したものだ。サンダーズも指摘するように、ディケンズの死後、玄人筋での彼の評価は急落するが、しかし皿に登場人物が描かれ、それが広く出回るようなことは、トロロブやジョージ・エリオットやハーディではおよそ考えられないことであり、大衆的人気が世代から世代へと受け継がれたディケンズならではのことだった。

ディケンズの作品は連載が終わる前から舞台上がったことで有名である。ディケンズの生前と死後に劇化された彼の作品のオペラ版やミュージカル版をも含めた演劇史を扱った部分も簡潔でありながら、示唆に富む。たとえば、今日に至るまで『クリスマス・キャロル』の翻案ものは枚挙にいとまがないが、サンダーズはドナルド・ダックまでが1983年にスクルージ役をディズニー映画で演じていると教えてくれる。しかし、ディケンズの作品が、劇であれ、ミュージカルであれ、バレエであれ、映画であれ、テレビであれ、つまり、どんな媒体に変えられたとしても、変わらないことが一つある。それは、「原作そのものが、予想もしないような、しかし、奥行きがあり、想像力をかき立てる広大な世界を切り開く力を常に持ち続けている」(193頁)ことである。これもまたサンダーズ一流のごくまっとうな意見である。しかし、学生であれ、学者であれ、時に難解を極めるディケンズの原文と格闘し、呻吟し、その豊穡な味わいを噛みしめたことのある人間ならば、サンダーズの意見に深く首肯することだろう。現代批評には目もくれず我が道を行くこの「ディケンズ入門」は、多少「凡庸」の憾みは残るものの、節度ある「中庸」の黄金律を貫いている。英国紳士にして碩学のさりげない余技というべきだろうか。

(山形大学助教授)

Linda Colley, *Captives: Britain, Empire and the World*
1600-1850

(Jonathan Cape: London, 2002)

金澤周作

ヴィクトリア朝文化研究全般についても言えるのであろうが、イギリス近代史の分野では、弱者、マイノリティ、地域（帝国も含む）、境界、多様、複雑、異種混交への注目が集まって久しい。国民にせよ階級にせよ性にせよ、代表例で全体がベタ塗りにされる歴史叙述への異議申し立てだ。このような流れ自体は学問的に妥当だと思うし、実際、先達のすぐれた諸業績にはさまざまな気付きを促される。しかし、量産されているきらいのある最近のこの種の研究は、誤てる「大きな物語」を極小の事例によって突き崩す可能性を相変わらず謳ってはいるが、やっていることは使い古された手続きによる粗探し、あるいは再確認の類であり、しかもレア・ケースの提示に通説批判という大義名分を与えるために、現実にはもはや誰も奉じていないであろう単純で平板な大きな物語（イングランド/ロンドン中心史観、進歩主義的ホイッグ史観、男性/白人中心史観、など）を依然として仮想敵とし、結果的にそれらを温存しているようにさえ見える。

さて、ここで紹介する本の著者リンダ・コリーは、膨大な個別事例の読み込みからディテールを保ち例外を包含しつつ明確な一つの物語を紡いでみせる稀代の歴史家である。邦訳もなされた『イギリス国民の誕生』*Britons: Forging the Nation 1707-1837*（名古屋大学出版会、2000年：原著1992年）はそのみごとな実例だろう。それから10年、彼女はもう一つの物語『キャプティヴズ』を世に送り出した。これまでほとんど顧みられることのなかった史料群に着目して、ひとつひとつはきわめて小さくか弱い声たちの多様なざわめきを、もうひとつの歴史として位置づけることに成功している。

序章から目の覚めるような問題把握がなされる。ある世代以上のわが国のイギリス史研究者にとって『ロビンソン・クルーソー』は時代精神の象徴であろう。漂着した見知らぬ土地でも自己を見失わず、身につけた技術と倫理を駆使してそこをイギリス化し、あまつさえ原住民を懐柔しさえす

る。独立独歩の中産階級、強いイギリス、揺るがぬアイデンティティ。従来のイギリス近世・近代史、とりわけ帝国を主題とするそれは、いかなる立場をとるにせよ、力をつけたイギリスが世界に雄飛する右肩上がりのクルソー的な物語を繰り返しなぞってきた。しかし、この物語を同時代のイギリス人たちも共有していたのだろうか。コリーは『ガリバー旅行記』を対置する。同じく18世紀初頭に書かれた一種の漂流譚だが、訪れる先々で、異質な風習や人ならぬ住民に出会い、相対的に「大きく」なったり「小さく」なったりすることにより、アイデンティティが翻弄され、ついには馬の国で己（イギリス人）の劣等性を痛感させられ、ある種の絶望を抱えて帰国する。あのヨーロッパ北辺の小さな島々でわずかな人口しか養えない人々が、僻遠の地に帝国を形成する過程において、後に結果するところの「成功」を当然のことと楽観することなどできたのだろうか。いやできはしなかった、とコリーは主張する。近世・近代の間、多くの有名無名のイギリス人が海外展開の途上、異国で囚われの身になった。ほとんどは誰にも知られず埋もれ去った個人的悲劇であったが、少なくない数の人びとは、生きて故国の地を踏み、そこで自分を語った。そして無数の「キャプティヴズ・ナラティヴ」が残された。それらは何をどのように語り、イギリスの拡大路線を危惧する読者たちの琴線をどのように震わせたのか。本書はイギリス史におけるガリバー的な側面を、巧みなストーリー展開と説得的な史料提示によって鮮烈に照らし出している。

全体は三部で構成され、副題にあるとおり、250年にわたる「ブリテンと帝国と世界」が射程に入れられる。以下ではアウトラインのみ、ごく簡単に紹介したい。

第一部で扱われる北アフリカ地域は、17～18世紀のイングランド／ブリテンにとってもっとも重要度の高い「海外」であった。しかし、ここは魅力的な貿易圏であると同時に、アルジェリア、モロッコ、トリポリなどムスリムの影響圏でもあった。それゆえ危険を顧みず航行した船は多数、ムスリム勢力によって拿捕され、乗組員は非キリスト教世界へ連れ去られた。そしてかれらの捕囚体験は、そのまま当時の多様な「イギリス」人の置かれた状況を示していた。相対的に強力なオスマン・トルコ帝国とイスラーム、これに対する相対的に弱体なヨーロッパ諸国とキリスト教。白人およびキリスト教が文明ごと蔑視される転倒した世界。だが、反応の仕方は個々人で異なる。イギリス本国で下層に属し虐げられる立場にあった者の

幾人かは、棄教しムスリムの人生を選択した。プロテスタンティズムを強く意識するあまり、イスラームとカトリックを期せずして同一視する者もいた（政治的には敵の敵として友好関係がある場合もあった）。クエイカーなどのイギリス内マイノリティは、かえってトルコ世界をイギリスよりも寛容であると感じた、等等。つまり、危険な地中海「世界」に「帝国」を打ち立てんとする「イギリス」は、つねによそ者であり、しかも脆弱で、分裂的だった。

第二部の舞台である北米大陸には、17世紀初頭の時点ですでに白人の植民者が進行し、人口を増加させる一方、現地の「インディアン」は白人による殺戮やかれらの持ち込んだ病気によって減少・凋落の道を辿った。このコンテクストにおいて、インディアンによるイギリス人捕囚は頻繁に生じ、体験談も出版された。その語りは、遠隔地の心細さやフランスの脅威とも相俟って植民者の「イギリス」アイデンティティを強く示すが、当の本国では地中海の捕囚に比して、かれらへの関心は総じて薄かった。「小」国イギリスは北米に植民者は送れても、かれらを守る軍事力の配備にまでは十分に手を回せず、そのため大西洋をはさんで認識の溝が深まっていったのである。つづいて、イギリスは七年戦争でフランスに対して勝利を収め北米での優位を確立する過程で、協力的なインディアンへの好意と、増殖を続ける植民地人への危機感とを同時に募らせていった。こうして独立革命戦争につながるのだが、イギリス側は分が悪い。己の小ささゆえ味方を現地に求めざるを得ず（インディアンや黒人やオランダ系、スコットランド系、ユグノーなどのマイノリティ）、結束力を持たずに終わる。そして今度のキャプティヴズ・ナラティヴは、同じ言語を話し同じ姿かたちをした敵の手中に落ちた戦争捕虜によって書かれ、両陣営が互いを非難するためのプロパガンダ機能を果たし、植民地人はイギリス人を他者化しアメリカ人へと変貌する。

第三部は、北米植民地喪失後、イギリス帝国のいわば中心的地位につきつつあったインドにおける捕囚たちを主人公にする。本国に比して圧倒的な広さと人口の多さをほこるインドを、イギリスは東インド会社を介して統治しようとした。しかしこの獐猛で餓い馴らし難い「トラ」を相手に、数の少ないイギリスはセポイを組み入れ依存しつつも苦戦を強いられ、多くの軍人が捕囚の憂き目にあう。かれらの体験は、1780年代まではイギリスの弱さと屈辱を示すものだった。ところが1790年代以降、それはイギリ

ス軍の勇敢や美德の象徴へと徐々にシフトしはじめる。北米喪失に続くインドでの苦難は小さなイギリスの無理な拡大が限界に達したことの証であると理解されていたのが、マルサス説の登場と1815年のヨーロッパの平和回復とを契機に、イギリス帝国のポジティブな自己評価が台頭してくるのだ。そして、逃亡や寝返りという形で噴出していた軍内部にくすぶるアイルランド系などの下層兵卒の不満も、本国での労働者の生活改善が波及するにつれ解決されてゆく。

本書は1850年で閉じられる。「大」英帝国、ヴィクトリア朝は当面、心配から解放されたかに見える。捕囚たちの語りは聞こえなくなる。軍事力・経済力は他の追隨を許さない。しかし、イギリスの人々は、世界の人口に対して、あるいは世界の広さに対しては、必然的に少数派たらざるをえない。インドでも、中東でも、南アフリカでも、香港でも、オーストラリアでもカナダでも。かれらの不安はなんらかの形で歴史に刻まれているのではないか。帝国へ出向いたイギリスの人々を一種の「犠牲者」とすることで帝国主義に免罪符を与えてしまうかもしれない危険。本書に対するもっとも大きな批判だろう。を自覚しつつコリーのユニークなアプローチを引き継ぐならば、己の小ささにおののき世界の中で自己規定をしあぐねる個人史ないしはイギリス史を綴る作業が可能かもしれない。冒険物語やパノラマ、見世物、博覧会や旅行記、博物館、文学、絵画、等にもヒントは蔵されているだろう。この種のテーマをすべて、弱者に対する強者からの差別的な行為やまなざしとして、そうでなければ強者に対する弱者からの主体的抵抗の痕跡として解消してしまうクルーソー的な帝国史研究の窮状を突破する強力なオルタナティブになるのではないだろうか。もちろん、コリーが本書を通じて訴えているように、個別事例は、それだけで通説的コンテクストを批判・否定できるわけではない。事例の集積と鋭い分析から、より妥当なコンテクストを引き出してこそ、説得する力と反論を受けて立つ資格とを持つであろう。評者としては、本書が刺激となって野心的研究が産出されることを願っている。もっとも、このように大上段に意義を云々せずとも、本評でまったく言及できなかった多彩極まりない捕囚たちの語りの数々は、それ自体で十分に手に取って読むに値する魅力を備えていると思う。

(川村学園女子大学専任講師)

Michael Diamond, *Victorian Sensation: Or, the Spectacular, the Shocking and the Scandalous in Nineteenth-Century Britain* (Anthem Press, 2003)

田中孝信

ヴィクトリア朝の人々が道德規範を重んじる反面、いかにセンセーション、すなわち「何らかの出来事によって社会に引き起こされた興奮状態」、もしくはその出来事そのものに喜びを見出していたかを、新聞雑誌の記事、ミュージック・ホールの歌、ブロードサイドなどのおびただしい数の具体例で読者を圧倒しつつ証明する、それが本書の際立った特徴である。本書を読むとき我々は、従来も指摘されてきたこの二面性を、まるでヴィクトリア朝にタイムスリップしたかのように間近なものとして捉えることになる。時代の本質はセンセーションにこそあったのではないかという気持ちすら抱く。それは、著者がもともとBBCワールド・サービスに勤務していたジャーナリストであり、自らもヴィクトリア朝のマスメディア関係の膨大な資料を有する好事家だからこそ成し得た業と言えよう。

センセーションとヴィクトリア朝との強い結びつきを、マスメディアを通して証明しようとするのも理に適った方法と思える。なぜなら19世紀は印刷メディアが爆発的發展を遂げた時代であり、新聞雑誌は安価となり国中に配達され、あらゆる階級の人々が容易に手に取ることができるようになる。そしてメディアは、できるだけ多くの人々を惹きつけ売り上げを伸ばすために、実際センセーション報道に頼ったのである。そうしたメディアと大衆との関係を基軸に据えて、本書は、社会に衝撃を与えた出来事を平易な英語で、それも数多くの貴重な図版でもって、現代の読者の眼前に甦らせる。以下では、序に続く8章の盛り沢山な内容を簡単に紹介しておく。

第1章では、今も昔もイギリス人にとって最大のスキャンダルの源である「王室」が取り上げられる。若き女王の即位に始まり、アルバート公との結婚と「ソーセージ」と揶揄されたドイツ人王子たち、ジョーンズ少年のバックingham・パレス侵入事件、7度にわたる暗殺未遂、帝国主義の浸透を背

景に催された「ゴールデン・ジュビリー」と「ダイヤモンド・ジュビリー」センセーションのもう一人の主役である皇太子のアレクサンドラ王女との結婚、モダント離婚裁判とクロフト事件での法廷尋問、瀕死の病からの回復と国民の熱狂。さらには、スルタンやシャーの訪問に対する人々の反応が記される。

第2章「政治の動き」ではチャーティズム、その失敗ゆえに一般大衆が「抑圧と自由に関して自分たちが深く感じていた思いを、イギリスを訪問する外国人に投影させた」ものとして、ガリバルディたちに対する反応が挙げられる。そしてアイルランド問題と「パーネリズムと犯罪」記事事件。ティチボーン事件がセンセーションを引き起こしたのは、階級問題と結びついていたからだと指摘される。また愛国心は、反ロシア派と反トルコ派の対立となって表れ、ディズレイリ対グラッドストーンの争いとなる。帝国主義の90年代、ポーア戦争最大のセンセーションとしてはマフィキングの解放が取り上げられる。なぜこの小さな勝利がこれほどの高揚をもたらしたのが分析され、これを境に「センセーションを笑ったり諷刺する傾向がほとんど見られなくなる」と言う。

第3章は「宗教と道徳性」。プロテスタントイデオロギイこそが国民的同一性を示す必須の要素と見なすイギリスにあっては、悪人はカトリック教徒であり、英雄はプロテスタントというメロドラマ的二項対立が成立する。「教皇の侵略」に奮え尼僧スコラスティ裁判に好奇心を刺激される一方で、人々はバプティストのスパージャンや福音を説くアメリカ人ムーディとサンキーの信仰復興運動に、その演技性ゆえに惹きつけられる。逆に不信仰も、カトリック教以上にたちが悪いものと見なされ、無神論者ブラドローの議員資格問題を巡る動きが詳細に記述される。彼の同志ベサントの場合、女性であるにもかかわらず、性という不道徳な問題を取り上げ、そのモーレスの改革を唱えたために、また、同じく女性であるバトラーは、伝染病予防法や児童売春と戦ったために、センセーションを引き起こす。後者の運動に加わったステッドや救世軍が、センセーションへの人々の嗜好をうまく利用して改革運動を推し進めた点で、時代の枠に囚われないモラリストであったと述べられる。

「セックス・スキャンダル」を扱った第4章は、性の問題を世間は避けようとしながらも多大の関心を寄せ、多くは法廷という真実を追求する責務のある場所からの新聞報道によって広まったとする。同時に、新聞はどれ

だけのことを公にすべきかが問題になった。1858年の離婚裁判所の設置以降は、チェトウィンド裁判、キャンプブル裁判、オーシェイ裁判など上流階級の離婚問題がセンセーションを引き起こす。大衆は、自分たちとは異なる世界を覗くことに食指を動かされたと考えられる。同性愛事件も大きなセンセーションだった。クリーヴランド事件やワイルドを失墜させた「社会的スキャンダル」。いずれにせよ新聞は、人の不幸を大いに楽しむ風潮を遺憾に思うと主張しつつ、熱心に報道するという、現代のマスメディアに共通する姿勢を示すのである。

第5章は「殺人」。大衆は理想的な殺人ドラマとして、犯罪・裁判・絞首刑の三幕を期待し、裁判は娯楽と化す。クールヴォアジエ事件、マニング事件、ラッシュ事件、パーマー事件といった殺人が挙げられるが、どの事件にも積極的な反応を示したディケンズと彼の作品との関係を、あらためて考えさせられる。殺人の一つの特徴と言えるのが、中産階級女性による恋人や夫の毒殺である。マデリン・スミス事件、ブラーヴォー事件、メイブリック事件などからは、仮面の背後に渦巻く激情を垣間見る思いがする。最後を飾るのは「切り裂きジャック」事件であり、「噂、推測、不確実性」こそが、これをヴィクトリア朝最大のセンセーションに仕立て上げる。

第6章は「センセーション小説」を扱う。殺人、不倫、重婚といった主題が、60年代には小説にも採り入れられる。不道德だとして非難されたが、最後には善が勝利を収める。また、日常性も重要な要素である。その前身を著者は、レノルズのペニー・フィクションに見る。実際レノルズの小説に見られる社会批判、暴力、セックスは、中産階級の客間に相応しく弱められた形でセンセーション小説に伝えられているのである。『ロンドンの秘密』を始めとするレノルズの著作は、社会史的側面はもちろん、そうした観点からも再評価の必要があるように思える。コリンズ、ブラドン、ミセス・ウッドたちの小説が紹介され、それらが果たした最大の功績は、男性が望んでいる以上に責任感のある才能豊かな女性を生み出した点にあるとし、90年代の「新しい女」の先駆けになると論じる。

「センセーション小説」が中産階級向けならば、第7章の「センセーション劇」は主として下層階級に好まれた。センセーション小説の方は現在再評価の気運にあるが、センセーション劇を含むメロドラマはこれまで余り顧みられなかったのではないか。その意味でも本章は、メロドラマ研究のための一つの指標になってくれよう。「センセーション劇」と「センセーシ

「オン場面」の定義に始まり、『アンクル・トムの小屋』やセンセーション小説の翻案劇について述べられ、60年の『美しき娘っ子』を皮切りにブーシーコーやリードの一連のセンセーション劇が紹介される。また、センセーション劇の流行が帯びる営利主義の問題が、演劇の衰退との係わりから指摘される。

第8章では、センセーションの定義の一つが、それを「作り出す出来事もしくは人物」である点に着目し、「演芸のスターたち」が人々に受容された経緯を追う。それを可能にした要素として、ジャーナリズム、交通手段の発達、興行師の手腕が挙げられる。大部分のスターがアメリカや大陸からの訪問者であったとして、親指トムと興行師バーナム、リンド、ブロンディン、レオタード、「ダンドリアリ卿」、メンキン、レイチェル、ベルナル、リスト、「バッファロー・ビル」、バーナム&ベイリーの「地上最大のショー」が紹介される。イギリス人は、アーヴィングと朗読者としてのディケンズの二人である。レイチェルの演技に対して観客が示した嫌悪と魅惑の両義性、アーヴィングの演技の本質と革新性、「ゴールデン・ジュビリー」の年に訪英した「バッファロー・ビル」に対するイギリス人の心的態度は、ヴィクトリア朝のエトスとの関連で興味をそそる問題を孕む。

最後に著者は、今日のマスメディアの報道姿勢の源がヴィクトリア朝にあるとし、センセーションの質も本質的には何ら変わっていないと指摘する。そして、人々がセンセーションを追い求める点でも両時代は共通しており、結局は人間性に帰着する問題だと述べる。ただ同時に、ヴィクトリア朝のセンセーションは、時代と必然的に結びついたものでもある点に注意を向けるのを忘れてはいない。その関連性を個々のセンセーションに見てゆくことで、時代の全体像が明らかになると示唆する。

かくしてヴィクトリア朝の多産性を肌で味わいたい者には魅力溢れる書物であるわけだが、物足りなさも覚えないわけではない。センセーションと時代との関連性にしたところで、示唆されるにとどまっている。例えば、女性殺人者と狂気、「切り裂きジャック」事件と反ユダヤ主義、欧米のスターたちがイギリス人に与えたカルチャーショックについて突っ込んだ探究はなされない。一般的に挿話的・逸話的に資料を提供することに重点が置かれ、個々の事象に関してもう少し分析が望まれる。しかしこれらの点は、ヴィクトリア朝のセンセーションを楽しもうとする本書の性格上、無い物なだけかもしれない。それは、むしろ我々研究者の課題であろう。本書を

足がかりに我々は、ヴィクトリア朝にさらに奥深く入り込むことができるのは確かだ。また、センセーションはイギリスに限ったものではない。同時期の日本やヨーロッパと比較検討することで、ヴィクトリア朝イギリスのセンセーションの普遍性と特異性を浮かび上がらせることも可能となる。本書は、そうした研究意欲を喚起する潜在性に富んでいるのである。

(大阪市立大学助教授)

Jonathan H. Grossman, *The Art of Alibi : English law courts
and The Novel*

(Johns Hopkins University Press, 2003)

要田圭治

19世紀ヨーロッパを語るとき、フーコーはもっぱら監獄の規律・訓練にモデル化された処罰の方に注目するけれど、じつはこの時代のイギリスで中心的役割を演じはじめたのは裁判（法廷）の方なのだ。フーコーに寄り添いながらも、このようにグロスマンは逆に彼が取り上げなかったことに注目する。フーコー自身、それまで犯罪の事実が確認され、それが違法であるか否かだけが問われてきたものが、近代になると法以外の文脈が介入してきた、と言っている。『監獄の誕生』にあるように、犯罪者のどこに原因があるのか、「本能なのか、無意識なのか、環境なのか、遺伝なのか」が問われるのだ。このとき法律家が被告を告発し、または弁護するために用いる言説が重要になるが、それは物語を作り出すことであり、19世紀イギリス小説は裁判が優勢になる過程とともに発展した、というのがグロスマンの見方である。そして、この見方に立つ限り、本書がフーコーの見方から踏み出しているとは言いがたい。裁判が原因の探求に遡行するのであれば、それは、矯正・治療、規律・訓練を支配原理とする世界の内部で起こ

ることだからだ。

グロスマンは社会の歴史的変化を追うことから始めている。法廷では、個人が直接語る言葉よりも、状況証拠が採用され、法廷弁護士がそこから編み上げる物語が優勢となった。裁判が絶頂に達した40年代に小説が堅固なジャンルになる。つまり、犯罪者の伝記から小説への飛躍は、絞首台から法廷へという司法の取り組みのパラダイムシフトを考慮に入れなければ理解しがたい、といった指摘は、それこそ状況証拠によりかかっていると思えないでもないが、考察の枠組みははっきりしている。ただ、気になるのが、本書で主として分析される小説では例外なく法廷場面が描かれていることで、あとで述べるように、この選択が本書の可能性と限界の両方を示していると言えるだろう。

まず *Caleb Williams*(1794)について、グロスマンは、この小説がナラティブの構造を通して司法のシステムと関わっていると言う。ケイレブの語りは犯罪者の伝記という文脈に属しているのだ。言うなればケイレブは自己を弁護して一方の側から語っているにすぎないとして、グロスマンはその語りの方に切り込む。すなわち、一人称で語りながら、自己を弁護するため他者の発話を自在に取り込むケイレブに、ゴドウィン是他者の精神に入り込む作家の力を付与した。それゆえケイレブは腹話術師のように、様々な他人の声で語ることが出来るようになる、というグロスマンの見方は、それが語りについて言っている限りは面白いが、背景に複数の個人の声を要求する裁判の連続として世界が経験される時代があるといい、それをこの小説が映しているとする見解にはわかには呑み込みがたい。

*Caleb Williams*論でグロスマンは当時の急進派に対する裁判に言及しているが、それよりも現実の裁判が作品の内容にくい込んでいるとされるのが *Frankenstein*(1818)である。これについてグロスマンは、作品の背景に、執筆当時作者メアリ・シェリーの夫、パーシー・ビッシュ・シェリーが巻き込まれていた、前妻との間に出来た子供の監督権をめぐる裁判を置く。この裁判は、父としてのフランケンシュタイン博士と子であるモンスターの関係に反映しているが、子が父の監督権を剥奪しようとする現実の裁判と、父が子を拒絶せざるを得ない作中の親子関係は逆である。むしろ、メアリは二つの関係を逆位相に置き、あえて人間関係を混乱させた上で、それまでは見えてこなかった、隠された意味を読みとろうとしたのだという。*Frankenstein*は法と対峙してその意味を探るメアリの姿を映していること

になる。モンスターとフランケンシュタイン博士のどちらかが悪いというのではない、悪いのは関係であり、メアリは関係を再調整できる新しい法の枠組みを求めたとして、法を超越することを希求したパーシーとの違いが指摘されている。

メアリ・R・ミトフォードが*Pickwick Papers*(1836-37)についていった「断片的だが、裁判シーンは完璧」だという評言をきっかけに、グロスマンは、自ら複雑な筋立てを持つヴィクトリア朝小説の走りとみなすこの小説で裁判シーンが充実していることに注目する。ピクウィック氏とバーデル夫人の一件が裁判事件として成立するやいなや、二人の間に過去に起こった事件がたちまちのうちに証拠として潜在性を持つことになる、と言うグロスマンであるが、それは出来事の細部が、潜在的に合理的因果関係を持つことになるヴィクトリア朝小説の一面を物語っていることになるだろう。だが、*Pickwick*には彼が触れないもの、つまりむしろ物語の流れから隔離していながら読者を魅了してやまない、えてして暗い雰囲気につつまれた挿話があることを読者は知っている。そこでは狂気にしろ、罪人の死にしろ、意味の崩壊が来しているのだ。表象すること自体がその崩壊をつなぎ止める試みに他ならないのだけれど、この時代の小説はこのような表象に関わってはいないのか。この観点に立てば、グロスマンが言うのとは違って、この挿話に類した話が前景化して、ある場合には主たる物語と融合し、また別の場合にはそれと拮抗することにヴィクトリア朝小説の成長過程をみることもできるのではあるまいか。

それと似たことが、*Mary Barton*(1848)の分析にも感じられた。グロスマンは*Pickwick*に関して「著者性」の問題に触れて、弁護のためにキャラクターを創造する法律家と作家が重なり合うことを指摘しているが、*Mary Barton*においては、語り手と読者、テキストの関係に著者性の問題をみている。ギaskellの語り手は物質世界に集中して独特のリアリズムを実現しているが、それは中産階級読者層の外に労働者の世界を確かなものとして描いたものであり、ギaskellのテキストは二つの世界の橋渡しとなっているのだという。だが、ここで問いたいのは、労働者階級が置かれた苦境、スラムの酸鼻を伝えると一口に言うけれど、そこには常に表象の問題がつきまとっているのではないかということだ。意味の限界を超えたところのものをいかに伝えるか、という問題はないのか、と。裁判の言説が事態を説明し得るという錯覚に安んじているとは言わないけれど、幾多の局

面に対処が困難な問題にヴィクトリア朝小説の表象は立ち会ったのではないか。

ニューゲイト・ノヴェルでは犯罪者と善人の間の皮膜が薄くなっている。例えば、ブルワーの*Paul Clifford*(1830)では、罪に関して、主人公がどう判断し、小説がどう判断しているかあいまいだし、主人公の視角と語り手のそれが重なる場合があるが、それには罪に対する姿勢の不明瞭さが一因となっている。グロスマンはそう言い、1830年代、40年代のニューゲイト・ノヴェルでは、全知の語り手が描く犯罪者の視角が法廷の弁護士による全知の弁論に対応していると言う。その語り手と犯罪者が重なり合うのが*Oliver Twist*(1837-38)で、その点でこの小説はニューゲイト・ノヴェルの系譜に属している。また、全知の語り手が、二人の犯罪者の心理学的描写を亢進させるとき、疎外された二人の犯罪者に取り込まれた読者の視角と社会の視角の違いが明らかになる。グロスマンはこう指摘して、*Oliver Twist*がニューゲイト・ノヴェルを深化させる一方で、それと葛藤してもいると言うのだが、この葛藤がどこに生じ、それはなぜだったのかという考察が必要だろう。ただ、彼が、ブラウンロウがモンクスを自白に促す警察の役を果しているのを指摘して、*Oliver Twist*に探偵小説の走りをみていることには注目したい。自己弁明を許されないモンクスだが、犯罪者の内面に入らずに一方から語るのが探偵小説だというのである。

このように、グロスマンは裁判と小説を、語りの可能性の方向から論じてきたのだが、なぜか結論部にきて方向を変え、語りの不能に及んでいるように見える。だが、それによって、これまで評者が呈してきた疑念からんでくることにもなる。ここで彼は*The Heart of Midlothian* (1818)で犯罪者の伝記の限界に触れ、裁判のパラダイムを小説に取り込んだウォルター・スコットを、ここまで考察してきた小説群の始祖の位置に置く。しかし、評者の関心は、グロスマンがこの結論部に持ち込んだロバート・G・ハッチソンの*Awaiting the Verdict*(1890s)の方にある。法廷との間の扉が閉ざされた控え室で家族が評決を待つ光景は、モダンな苦悩、その視野が孤立し、断片化した状態で個人が政治社会組織と戦う孤独な風景を感じさせるとグロスマンは言うのだが、この絵は別にそれよりあとの小説だけのアナロジーになっているわけではなく、それ以前の時代にも言及しているのではないか。ものごとは、意味の向こう側にかろうじて黒々と横たわ

っているにすぎない。グロスマン自身ジェイムズ・ホッグの*Confessions of a Justified Sinner*(1824)が「弁明できる (accountable)」とはどういうことが問われていることに触れているのだ。主体が空洞化して、弁明も説明も出来ず、責任を取り得ないものになったとき、その空洞に降り立っていくものこそ文学であろう。19世紀という時代に、ホッグの示唆したこの空洞は思いの外大きく、閉ざされないままに小説を浸食し続けていたに違いないのだ。しかし、このことは、別に裁判とのアナロジーで小説を語らないでも見えてくることではなからうか。対象にされる小説は、すべて裁判が筋立てに取り込まれたものばかりであるが、裁判とは直接関係しない結論をこの本は導き出したのではないかと思われるのだ。

それゆえ、是非とも本書に入れてほしかったのが、具体的な法と、それをめぐって行われる裁判の実例だ。裁判は、いってみれば意味の崩壊が来たところに意味を構築してさらなる崩壊をくい止めようとする試みである。この意味で、グロスマンの言うように裁判がフィクションと重なっているとすれば、逆に法はあくまでも法にとどまることによって、社会というフィクションの支えになっているはずだからである。19世紀の裁判において法律家の二次的言説が跋扈することになるのであれば、そのとき法がその言説とどう組み合ったのかという実例、すなわち具体的な裁判の詳細な分析が必要だったのではなからうか。それによって、小説と裁判の関係がより明瞭になっただろと思うのだ。

(広島大学助教授)

松岡光治編著『ギッシングの世界 全体像の解明をめざして』
(英宝社、2003年)

新妻昭彦

副題の続きに「没後100年記念」とある。ギッシング研究を国際的に推進してきた3名の研究者に加え、10名の研究者による「総合的な研究書」(375)である。同時に評伝などを除けば、どうやら事実上本邦初の総合的研究書であるらしい。初めてというのは驚きだが、ある意味では、広く知られ愛読もされながら、良かれ悪しかれそれにとどまってしまっているGeorge Gissingという作家の現在の位置をよく表しているのかもしれない。ギッシングへの熱意と愛情、意欲と気概にあふれ、時間と労を厭わず丹念に編まれた好著であり、日本のギッシング研究史上、文字通り画期的な成果である。

この書を評するには、なによりその企画・編集方針について考えなくてはならない。まず一見して思うのは、先に同じ松岡光治氏の編集により同じく英宝社より刊行された『ギヤスケルの文学』(2001)との類似である。ともに「巻頭言」と「文献一覧」に始まり「生涯」と「100年間の研究・批評」が続き、さらに代表的長編作品にそれぞれ1つの章が割り当てられ、そこに詳細な「関連情報」の1章が付けられている。各作品についての章にはまず「梗概」が置かれ、そのあとに「論考」が続くのであるが、その論考の執筆者名は、本文よりもポイントを落とした「註」のあとにその「註」と同じ小さなポイントで、しかも括弧に入れられ、さらに目立たぬように右寄せで示されている。となれば、研究社刊『20世紀英米文学案内』やその後継にあたる『小事典』シリーズのような、かつては多く存在した作家別入門書シリーズの第2弾かと期待することになるのだが、残念なことにそうではないようだ。第3弾の刊行は約束されていない。そして誤解なきよう急いで付け加えなくてはならないのは、本書も決して通常言われる意味での「入門書」ではないということである。

巻頭に英語文献一覧、巻末にはクスティヤス編『ジョージ・ギッシング書簡集』第9巻の年譜に拠る詳細な「年譜」を配し、第15章「ギッシング関連情報」には、学術誌*The Gissing Journal*、1999年と2003年に開催された2度の国際会議、Wakefieldにあるギッシング・トラストとギッシング・センターについてのこれも微に入り細にわたった紹介、ギッシング関連のメイリング・リストとウェブ・サイトから古書購入のためのサーチ・エンジン、さらには電子テキストをコンコーダンスとして利用するためのソフトウェアの

紹介とその実践例まで示され、最後に日本語による研究書と翻訳の網羅的一覧が収められている。索引も詳細かつ精確である。時間と労力を十分に傾注し、A5判xxvi+404頁のスペースに遺漏なく盛りこめられるだけの情報を盛り込む、これは編者松岡氏の研究姿勢と、おそらくはその人となりによるものであろう。氏のホームページにアクセスした経験がある方なら、たちどころに納得するに違いない。いずれにせよ結果として、ギッシング研究を志す者にとっては必携ともいべきデータ・ベースが成立することになった。しかし、これは本書の一面にすぎない。そう、たいへん欲張りな本である。最終的には「(没後100年記念)」と追記することにより、「没後100年記念論集」としての性格まで付与されているのだから。

次に注目すべきは『ギッシング・ジャーナル』を刊行より支えてきた Pierre Coustillas、Jacob Korg、小池滋の3氏を迎え入れたことであろう。第1章「ギッシングの生涯」は1983年に*The Dictionary of Literary Biography* にコールグ氏が寄せた文章の松岡氏による翻訳と詳細な訳注からなり、第12章「その他の長編・中篇小説」は同じコールグ氏の *George Gissing: A Critical Biography*(1963)の該当箇所を光沢隆氏による翻訳である。さらにクスティヤス氏による書き下ろしの「巻頭言」のほかに、2003年の国際会議での講演“Gissing: A Life in Death A Cavalcade of Gissing Criticism in the Last Hundred Years”を得てその翻訳を第2章「没後100年間におけるギッシング批評の進展」にあてている。さらに小池滋氏からは第14章「ギッシングとディケンズ」を得た。各作品を担当する10名の執筆者も、これまでギッシング研究を支えてきたベテランとこれから支えて行くであろう若手を配している。なにやら、これまでのギッシング研究を一旦総括し、これからの研究への拠点を築くといった趣きさえ感じられる。

最後に評すべきは「論文集」としての一面である。質量ともにこれが本書の中核であることは、本来言うまでもないことなのだが、前述したように付加価値をふんだんにつけることによって「総合的な研究書」(375)になり、「没後100年を記念する普通の論文集」(375)となることが回避された結果、論文集としての性格が、その分目立たなくなった感があるのは残念である。副題に「全体像の解明」とあるように、「重箱の隅をつつくような局所的な読みではなく、ギッシングの文学全体に関わる大きな問題について、新たな視点で読者を大いに啓発するような読みを提供すること」(vii)が「編集方針」

として執筆者に課せられていたのかもしれないが、いずれも「普通の論文集」を構成するに余りある論文である。執筆者名は前方に大書されても良かったのではないだろうか。

長編小説の選択は現在翻訳が出ている*The Unclassed* (1884)、*The Nether World* (1889)、*New Grub Street* (1891)、*Born in Exile* (1892)、*The Odd Women* (1893)、*Sleeping Fires* (1895)、*The Whirlpool* (1897) とし、これに旅行記*By the Ionian Sea* (1901)と随筆*The Private Papers of Henry Ryecroft* (1903)を加えた9作品が第3章から第11章までで扱われ、第13章が短編小説にあてられている。本書にはすでにこれも気概にあふれた大野龍浩氏による書評があるので(『英語青年』2004年5月号)、無用な重複は避けたいと思う。各論文に見い出されるヴィクトリア朝文化研究上の可能性を指摘していくことにしよう。

第3章(『無階級の人々』)の倉持晴美「不幸を見据える」と第4章(『ネザー・ワールド』)の倉持三郎「どん底に住む人々」は、ともに貧窮層を描いた初期作品をギッシングの伝記的事実を介して当時の都市問題へと結びつける。第5章(『三文文士』)の松岡光治「貧乏作家はうだつが上らない」と第6章(『流滴の地に生まれて』)の金山亮太「汝再び故郷に帰れず 突然変異か形質遺伝か」では、ギッシングが抱いていた「決定論的教育観・階級観」や「遺伝的階級観」が明らかにされる。第7章(『余計者の女たち』)の武田美保子「狂気の遊歩者 身体記号としてのモニカ」と第9章(『渦』)の太田良子「ギッシングと姦通小説」はともに「新しい女」小説として研究が進んでいる作品だけに、ヒステリー症や優生学的退化であれ、姦通であれ、この領域における研究の豊かさを実感させられる。第8章(『埋火』)の小宮彩加「“*Carpe Diem!*” 『埋火』の選択」と第10章(『イオニア海のほとり』)の並木幸充「ギッシングの「詩と真実」」。ともにギッシングとギリシャ・ローマ古典文学・古代世界との結びつきに基づいた作品であるが、さらにオマール・ハイヤーム・クラブの存在、インターテキストとしての「ルバイヤート」の可能性(第8章)、この時期以降の「イタリア旅行」というトポスの持つ意味が示される。第11章(『ヘンリー・ライクロフトの私記』)の加藤憲明「『ライクロフト』に見る新たな自己」における虚構の中での自己表現・実現は、『三文文士』論や『流滴の地に生まれて』論にあるメタフィクショナルに分身を創造することによる自己形成に相通するものがある。第13章、八幡雅彦「短編小説」は、約115あるとされる短編小説の中から、ロンドンの

社会史を構成する各「生活階層」が描き出された9編を選んで論じたものであるが、ここが豊穡たる研究領域となる可能性を感じさせてくれる。

ギッシングが「社会、階級、文明、都市、大衆、教育、改革、女性、結婚、家庭、商業、金銭、芸術、科学、人生、自己」(vi)といった「多くの問題」に矛盾した感情を抱き、「保守主義、古典主義、理想主義、実証主義、自然主義、平和主義、環境保護主義、現世謳歌主義、芸術至上主義、運命論、不可知論、懐疑論、リベラリズム、ヒューマニズム、フェミニズム、アンチヒロイズム」(vi-ii)といった多様な面を持って小説を書いていたことが確かである以上、ヴィクトリア朝文化研究においてギッシングに関する研究が今後隆盛になるのは間違いないだろう。このとき研究対象として再評価されるギッシングが、「愛すべきマイクロフト=ギッシング」にとどまらないであろうことは、本書の各作品論がすでに実証してみせている。しかし昨今の文学研究の動向からすれば、今後ギッシングのテキストを対象とする研究は、本書各論に通底する作家研究特有の敬意と愛着とは相容れないものになる可能性が高いのではないかと思う。十九世紀末のインターテキストの一部と化したギッシング。しかしそうなったとしても、本書の意義が変わることはないものと思う。本書がギッシング研究にとどまらず、さらに広くヴィクトリア朝文化研究、世紀末研究に対応するだけのポテンシャルを保持していると考えられるからである。

(立教大学教授)

森薫・村上リコ 『エマ ヴィクトリアンガイド』
(エンターブレイン社、2003)

本書の紹介を始める前に、まずは『エマ』から語り始めねばなるまい。オースティンの小説ではない、ヴィクトリア朝のメイド、エマをヒロインに、ロンドンからハワース近辺を舞台として繰り広げられる少女マンガである。

そもそも少女マンガはヴィクトリア朝文化と無縁の存在ではなかった。例えば、ラファエロ前派のバーン＝ジョーンズや、ダンテ・ゲイブリエル・ロゼッティの描く女性像、波打つ髪に絡む花、草、鶯の意匠化は、山岸涼子、萩尾望都といった作家に大きな影響を与えている。また、題材としても、ヴィクトリア朝背景は、異国情緒を求める物語の中に書き込まれることが少なくなかった。その中でも坂田靖子の『バジル氏の優雅な生活』は、主人公の名前から明らかであるように、『ドリアン・グレイの肖像』を意識したつくりとなっており、メアリ・キングスレイやジェイン・モリスを思わせる人物が少しずつ位相をずらして登場してくる。憧れの異国という記号を超えて、ヴィクトリア朝擬古小説／マンガとなっており、ファンも多い。こうしたヴィクトリアン・マンガの最近のヒットが、森薫の『エマ』である。

ストーリーは、まだ連載中ではあるが、おおよそ次のようなものだ。ひとさらいに誘拐されたのち、浮浪児として路上で暮らしていた孤児エマは、退職した家庭教師のケリー・ストウナー夫人に拾われる。雑役女中を探していた彼女は、薄汚れた浮浪児でありながら利発な顔立ちのエマを見込んで、一人前の女中に仕込む。そしてエマはめがねをかけたおとなしい、しかし聡明で美しいメイドに成長する。偶然、昔の先生であるケリーを訪ねてきたウィリアム・ジョーンズは、彼女を一目見て恋に落ちる……。爵位はなくても年収八万ポンドのジェントリ階級のウィリアムと、姓もわからない孤児の女中のエマ。二人の恋には当然ながら次々と障害が立ちはだかる。女主人ケリーの死後、エマは身分違いの恋をあきらめて故郷に向かい、その途上、ハワースに邸を構えるドイツ系のメルダース家に雇われることとなる。一方、失意のウィリアムは、捨て鉢な気持ちで、それならば紳士に徹し、紳士の鏡になって死んでやる、と社交に仕事に精を出す。ウィリアムが子爵令嬢と婚約を交わしたとき、運命のいたずらか、ハワースからメルダース夫人の付き添いとして上京してきたエマと衝撃の再会を果たすこ

とになった…。残念ながら、最新巻の四巻目はここで終わり、身分違いのこの恋物語の大団円はまだ先のことになる。

浮浪児出身にしてはあまりに上品なエマの描写が最初は気になり、ウィリアムとデートしていったい話が合うのだろうかなどといらぬ心配をしたが、途中ではっと気がつき納得した。この二人は、共通の教師を持っていたのである。知人に無理だと止められたにもかかわらず、教育は階級を超えるという熱意を抱いて、エマを有能で上品なメイドに育て上げたケリー。エマが去った後、傷心を抱えながらも上流紳士を演じ抜こうと決意するウィリアムは、心配する友人に向かって言っている「小さい頃から忍耐力だけは鍛えられている。あの先生に教わったのだからね」。おそらく彼は厳格な家庭教師ケリー夫人のお仕込みで、幼少のみぎりから、階級転覆にもつながりかねないリベラルな思想を植えつけられていたのだ。そうするとウィリアムとエマは、教育は階級を覆すという信念を賭けた、ケリー夫人の壮大かつ過激な実験のコマだったといえるかもしれない。

物語のあちこちにちりばめられたエピソード、たとえば象に乗って登場するインドの王子様、ミュージーズの巡回図書館、延々と田舎を走る列車のコンパートメントなど、ここにもそこにも展開するヴィクトリア朝の風景は、どこかで確かに読んだことがあるものばかりだ。失恋したウィリアムが、グレットナ・グリーンへ駆け落ちしようかと思ったけれど、まさかロマンス小説じゃあるまいし、などつつぶやく場面が、さりげなく挿入される間テキストの世界なのである。執事の名前がスティーブンスだというのもご愛嬌。

『エマ』がこれまでのヴィクトリア朝マンガと一線を画するのは、その緻密な、細部にまでいたるこだわり、とりわけ「階下の人々」の日常の描写の詳細さであろう。おそらくヴィクトリア朝の好きな人は、この「モノ」に対するフェティッシュなこだわりを、ヴィクトリア朝人と共有しているのではあるまいか。マンガは、そんなフェティッシュを惜しげもなく視覚化し、読者共同体に共有することを許すメディアである。そうすると、それら「モノ」たちが作り上げる世界のガイドブックが登場するのも当然といえば当然の成り行きなのであった。こうして『エマ』の副読本（教育は時代を超えることをも可能にするのである）が生まれた。

『エマ ヴィクトリアンガイド』のあとがきで、著者はこう述べている「マンガの舞台が英国ヴィクトリア朝なものでよく時代背景についてのご質

問を受けること、当時のメイドについてまとめた日本語でわかりやすい本が欲しいな—とっていた」。その結果、文章をコピーライターの上村リコが担当、森薫のイラストを駆使して、巻末に載っている参考文献は、英文原書も含めて百冊をゆうに超えるという、二百ページ弱の大変実用的な本が出来上がった。なぜ実用的かというと、ロンドンの地図や事物の図解があるばかりか、メイドになるにはどうしたらいいでしょうか、などというQ&Aコーナー（これはヴィクトリア朝の婦人雑誌の読者欄に似ていなくもない）、水晶宮でデートする際、押さえておくべきツボなど、凡そ役には立たない、しかし詳細で具体的なアドバイスが実に豊富だからだ。

本書の内容は、「仕事」「事物」「歴史」「創作」「書物」の五つの章からなり、三種類のコラム Maid servant's life, Victorian Note, Victorian Classroomが挿入されている。仕事の章で紹介されるのは、お屋敷に仕える男性・女性家事使用人の各々の仕事内容、上下関係、服装、給金、など。書き下ろしのイラストに加え、『エマ』本編からのカットが添えられていて、「ああ、あの場面には実はこういう文化的背景があったのだ」とわかる仕組みである。

事物の章では、まず十九世紀末ロンドン地図が、物語の舞台を示しながら解説される。そして社会制度、住まいと生活用品、食生活、ファッション、社交と娯楽と「アイテム事典」がつづく。ことばで説明を聞いただけではなかなかわからない、これらのモノたち。昔の写真や雑誌の挿絵では、なかなか鮮明に見えないような場合も多いが、ここがやはりマンガ家森薫の正念場である。この人の絵は、脇役の人物がときどき顔の見分けがつかないことが欠点なのだが、建物やインテリア、服飾は緻密に描かれていてわかりやすい。それぞれの事項に英語の原語表記が添えられているのも嬉しい。

歴史の章では、かわって十七世紀から二十世紀までの英国史が概観され、そこに『エマ』のストーリーガイドが加わって、物語を歴史的コンテクストに位置づける。ここでは簡潔にまとめられた階級と称号の解説がなかなか役に立つ。

創作の章は、『エマ』が連載されている雑誌、『コミックブーム』の漫画家、竹本泉と森薫の対談、森薫のスケッチ帳が紹介されている。そして、最後の書物の章は、ここまで読んできてヴィクトリア朝にすっかりおなじみになった人のための読書案内だ。オースティン、ブロンテ、ディケンズ、

コナン・ドイルからバーネット、セイヤーズ、クリスティなど、たしかにここまで『ガイド』を追ってきたひとなら百倍楽しく読めることだろう。

しかし、この『エマ』そしてその『ガイド』の読者層というのは、いったいどこにあるのだろうか。日常的には役に立ちそうもない詳細なディテイルに分け入って、『エマ』の世界に浸るのは？

『エマ』の連載誌である『コミックビーム』は、かなり通向けの月刊誌であるようだ。発行元はエンターブレインという、ファミコン、ゲーム系の雑誌を出している出版社で、この雑誌の掲載作品はかなり個性派のものぞろいである。単行本となった『エマ』はなかなかの人気とみえ、中規模の本屋には平積みになっているが、『ビーム』のほうはどこにでも置いている雑誌というわけではなさそうだ。

この書評を書くにあたり、漫画家のS氏にひとつづつでヒントを頂くことができたのだが、そこで初めて存在を知ったのが、ヴィクトリア朝ならぬ21世紀のインターネットのアンダーグラウンドであった。『エマ』とは直接関係はないかもしれないが、とS氏は、メイドさんを主人公にしたマンガには、パソコン・ゲームから発祥したコスチューム・プレイの伝統があると指摘した。「萌え」*を誘発するコスチュームとしての「メイドさんルック」は、当然そこに、主人への(性的)「隷属」を含意する。“Modern Babylon”はヴィクトリア朝とはちがいで、ネット上に展開するのだ。エマはあやうくホワイトチャペルの少女売春窟に売られる運命を免れたが、『エマ』人気の背後には、それと遠からぬ世界が隠れているらしい。

しかし、『エマ』という「正統派ブリティッシュ・ロマンス」の名誉のために、くり返し述べておくが、作品自体にそのような要素はない。『ガイド』の文章を担当した村上リコは、「キャラクター萌え」、「設定萌え」というのがあるとすれば、自分は「生活萌え」だと述べ、「違う世界のモノや場所や書物たち」をもっともっとよく知りたいという好奇心が、自分をこの仕事に向かわせたと述べている。『エマ』を、メイドさんもの「萌え」の世界から隔てているのは、おそらくここなのだ。

筆者が大学生の頃、一世を風靡した『ベルサイユのバラ』は、ファンをして西洋史専攻に走らせ、フランス語教室にぎわいを見せた。しかし、『エマ』には『ベルバラ』にあったようなカリスマ的人物もいなければ、華やかに繰り広げられる貴族たちの大歴史スペクタクルという性格もない。

わがゼミの学生達もだれも『エマ』を知らなかった。しかし、林望の『イギリスはおいしい』にはじまる一連のエッセイをはじめ、紅茶本やガーデニング本が一定のアングロフィリアのファン層を獲得しているのは周知の事実だ。『エマ』に登場する「アルパカ」「ポリッシュ」「マッフィン」などに「萌える」読者層はそのあたりにあり、『エマ ヴィクトリアンガイド』は、細部にいたるモノへのこだわりという点で、ヴィクトリア朝人とも結ばれた彼らに応えるガイドブックなのである。

* 「萌え」というのはきちんとした定義が難しいのだが、「燃える」から転じた語呂合わせで、ロリコン系アニメやゲームのキャラクターに夢中になって熱を上げる状況をさすらしい。

(愛知県立大学助教授)